

## 第2回「泉大津市オリアム随筆賞」

### 【最優秀賞】

いっぱい遊んで、いっぱい転んで

秋山瑞葉・香川県

雲ひとつない晴天が広がっている。まさにフリーマーケット日和だと奮い立ち、五平米にも満たぬブーススペースに雑貨を並べる。

「今日はよろしくお願いします。子ども服のお店なんですわね」

私と同じく一人で出店しているらしい、右隣ブースの女性に声を掛ける。悦子さんと仰るその女性は、小さなシャツを大切そうに畳みながら、にこやかに頭を下げた。

フリマ出店が趣味になりもう二年が経つ。最近ではお客さんとのコミュニケーションはもちろん、近隣出店者との会話も楽しみのひとつとなっている。女性一人で出店するとなると、お手洗いにいくのでさえ誰かの協力が要だし、何より六時間もの長丁場、セールストーク以外の世間話をしたい時もあるのだ。

「だいぶ風ぎましたね」

慌しい午前中が過ぎ客もまばらになると、悦子さんとお喋りする余裕も出来始めた。

「私フリマ初心者なんです。その上一人だから不安だったけど、楽しいわ」

悦子さんの左薬指に光る指輪を見て、今日は旦那さんは、と尋ねる。

「多分家で寝てるわね。よく寝るからか、身長だけは高くて。おまけに痩せぎすで黒縁眼鏡なんか掛けてるから、あだ名はウオーリー」

くすくす笑いながら悦子さんは、やっぱり商品を丁寧に畳んでいる。悦子さんのブースに隙間なく陳列されているのは、見ただけで女の子の服だと分かる、カラフルで可愛らしいデザインの物ばかりだ。

「娘さん、今お幾つなんですか」

悦子さんは次のスカートに取りかかりながら、七つ、と答えた。

「生きていたらね。小学校に上がる前に、天国に行ったの」

悦子さんのひっそりと物静かな横顔を前に、しばらく言葉が出なかった。

「服、売っちゃっていいんですか」

悦子さんは穏やかに頷いた。

「あの娘が亡くなってから、私毎日あの娘の服を洗濯していたわ。春だから淡い色のスカートで、今日は寒いから厚手のフリースをって、365日欠かさずコーディネートして。

でもある時気付いたの。過ぎていく季節に合わせてあの娘の服を考えても、服のサイズは五歳のままなの。私の手の皺は深くなるけど、あの娘がランドセルを背負うことは無いの」

その時やっと、前に進まなきやって思ったの。そう呟く彼女の声は、凜とした意思に満

ちていた。

「あの娘の服を売って決めた時、夫は大反対したわ。お前はあの娘の思い出まで奪うの  
かって。今日の朝だって、俺は絶対フリマには行かないからな、ってまだ反対してた」

でもね、と続けて悦子さんは前を見据える。

「奪うわけじゃないわ。もちろん捨てるわけでもない。この服達を別の子が着て、あの娘  
の分まで、あの娘ができなかった遊びや学びをしてくれたりって思ったの。その方があの  
娘も喜ぶと思ったの」

その時、一人の女の子が悦子さんのブースの前にしゃがみ込んだ。赤い水玉のスカート  
が気に入ったのか、小さな手に取って持ち上げている。スカートならさっき買ったでしょ  
う、と後ろから母親がたしなめる。

あげる。その様子を見つめていた悦子さんが、にっこり笑ってそう言った。

「御代は結構です。その服差し上げます」

まあ、いいんですかと母親が驚きながら礼を言う。そして、あなたもお礼を言いなさい  
と娘の背中を押した。

「ありがとうございます。大切にします」

悦子さんは、舌足らずに感謝を伝える女の子の頭を撫でた。

「大切にしないでいいよ。いっぱい遊んで、いっぱい転んで、破れちゃってもいいよ。  
この服がすぐに着られなくなるくらい、大きくなるんだよ」

穏やかな顔でそう言って、スカートを畳む。そして一度ぎゅっと胸で抱き締めた後、母  
娘に手渡した。

それは決して、哀しい別れではなかった。また遊ぼうねと亡き娘に、スカート越しに語  
りかける悦子さんの心の声が確かに聞こえた。

日も暮れ始め、フリマは終わりを迎えた。悦子さんの子供服はほとんど売れたようだっ  
た。相場の半分ほどの安価で販売していたので、出店料を差し引けば儲けはごく僅かだろ  
うけれど、彼女の表情は晴れやかだった。

「これでビールでも買って帰ろうかな。早く仲直り、しなきや」

小銭入れから視線をあげた悦子さんの言葉が詰まる。終始穏やかな顔で接客をしていた  
彼女の目尻に、初めて涙が滲んだ。視線の先を辿ると、長身痩躯の男性が立っている。黒  
縁眼鏡の奥の目が、赤く潤んでいる。

春の訪れを感じさせる柔らかな夕方が、すぐそばまで来ていた。